

## 太監亦失哈に就て

江嶋, 壽雄

<https://doi.org/10.15017/2335370>

---

出版情報 : 史淵. 50, pp.19-26, 1951-12-28. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 太監亦失哈に就て

江 嶋 壽 雄

滿洲金石志上、奴兒干永寧寺碑記二面の存在は餘りにも有名である。此の碑記の全文は吉林通志、内藤博士の讀史叢錄、羅福頤氏の滿洲金石志(卷六)、園田一龜氏の苦心に成る滿洲金石志稿(第二册)等に見ゆるが、そのうち闕字最少のものは滿洲金石志稿であり、次で滿洲金石志である。碑は二基あつて、一は永樂十一年九月の日附の碑記を刻した勅修奴兒干永寧寺碑(A碑)であり、他は宣徳八年季春朔の日附の碑記を刻した重建永寧寺碑(B碑)である。此の二碑記が明初の奥滿洲經略に就ての最貴重史料である事は云ふ迄もないが、二碑記を一讀すれば此の奴兒干招撫に活躍した亦失哈なる人物が大きく浮かび上つて來る。A碑記に據れば

……永樂九年春。特遣內官亦失哈等。率官軍一千餘人巨船二十五艘。復至其國。開設奴兒干都司。……十年冬。天子命中官亦失哈等。載至其國。□海西抵奴兒干及海外苦夷諸民。賜男婦以衣服器用。給以穀米。宴以酒食。……

と。即ち奴兒干都司の現地開設を司つたのも亦失哈であり、永樂九年春出發して松花江黑龍江を下つて奴兒干に至り、都司を開設し土人を招撫して同十年歸朝し、次いで永樂十年冬再び命を受け松花江の解氷を待ちて十一年春夏の交に吉林を發し、松花江沿岸の海西女直を招撫しつゝ同年夏頃彼の地に至り、奴兒干から樺太のアイヌ等まで招撫し、その地方の土人の信仰的中心且つ明朝權威の象徴として永寧寺を建立し、恐らくは翌十二年に歸つてゐる事が知られる。A碑記の日附の次に列擧された人名中第一に刻されてゐた闕字の「欽差□□□□□□□□」に亦失哈の名のあつた事は疑問の餘地はない。

次にB碑記に據れば

……永樂中。上命内官亦失哈等。□銳駕大航五至其國。撫諭□安。設奴兒干都司。……宣德初。復遣太監亦失哈。部衆再至。以□念聖天子與天同躰。……佛寺大會而還。七年。上命太監亦失哈同都指揮康政。率官軍二千巨艦五十。再至。……

とあり、宣德八年永樂寺が再建されてゐる。是によつてみると亦失哈は永樂中五回奉使奴兒干行を命ぜられ、更に宣德初と同七年と二回計七回も奴兒干に使用してゐるのである。此の亦失哈の奉使行の回数に就ては羅福頤氏は永樂間五回、洪熙宣德間五回計十回とされるが宣宗實錄とB碑記とを精査すれば宣德間二回が正しいと思はれる。此の事に就ては別の機會に譲るが、とに角前後七回に及んで遠く黒龍江下流奴兒干に使用して明の國威を宣揚し、東北滿洲の女直野人を招撫し彼等の朝貢羈縻を促した功蹟は彼の南海奉使の鄭和に比して遜色なきものと思はれる。然るに明史宦官傳には專傳なく、僅かに曹吉祥傳に兇狡宦官の一人として附載され、從つてそれは彼の奉使奴兒干にすら言及せず、ただ亦失哈が遼東に鎮守してゐた時の一事件を述べるに過ぎぬ。又遼東志もその傳を載せずただ官師志分守内臣の條の第一に亦什哈と云ふ名を記してゐるのみである。この亦什哈は亦失哈であるが、同書建置志分守太監府の條には「……分守監臣始于正統二年。改楊宣以充任。」とあり、第一代を楊宣としてゐる。しかるに亦失哈を第一に擧げる官師志・分守内臣の條には楊宣の名はない。かく遼東志の記載そのものが矛盾してゐるが、亦失哈が何時の頃か遼東鎮守三太監（鎮守・分守・監槍）の一に任ぜられてゐた事は曹吉祥傳と考へ合せて疑ひない。併し以上の小傳によつては明の滿洲經略に最も活躍し、永寧寺碑記に巨名をとどめた亦失哈と云ふ人物の正體は明瞭にはならない。

二

明史の職官志・三・宦官の條に據れば太祖は宦官を抑へて政治に干與せしめなかつたが、しかも洪武二十五年に宦官聶

慶重を河州茶馬市に派遣して敕諭せしむる所があつた。是が「中官奉使行事」の始であると云ふ。成祖の篡奪は南京の宦官の裏切に負ふ所があり、これより従來の宦官抑制が次第に弛んで來る。永樂中奉使外國、監軍巡視、各省鎮守、出征、督餉、坐營等に宦官が選ばれ、明代宦官の專恣を招く端初を創るのであるが、それは暫く措き、これによつて永寧寺碑記を解すれば亦失哈も亦奉使中官として成祖により奴兒干に派遣された宦官である。

永樂元年の邢樞の奴兒干派遣に亦失哈が同行したか否かは明かでないが、永樂九年、十一年と續けて奴兒干を招撫し、更に永樂十八・九年頃にも奴兒干に至つたものと思はれる。何となれば吉林劉清摩崖文として有名な明の造船總兵官劉清が「領軍至此」と記した洪熙元年と宣德七年とはその直後奴兒干招撫軍の發遣が行はれたのであるから、「永樂十八年領軍至此」つた時も招撫軍の發遣があつたに違ひなく、若しあつたとすれば前後の例が皆さうであるから奉使したのは亦失哈であつたと見て誤りない。永樂中の亦失哈の奉使行で明かなのはこの三回であるが、實際はB碑記に云ふ通り五回に及んだであらう。その後は宣德元年春に奴兒干に使し、二年八月頃歸還、次いで三年春奴兒干都司再建の爲出使を命ぜられ、松花江岸吉林地方で造船運糧の準備を行つたが意外に暇どり且つ費用も巨額に上つたので中止となり京師に召還された。併し都司銀印、經歷司銅印まで再鑄造しての奴兒干都司再建の明朝の意欲は宣德六年に至り實現の機を得、奴兒干都司の都指揮使康旺、都指揮同知佟峇刺哈の代りに新銳の康旺の子康福、佟峇刺哈の姪佟勝が都指揮同知、都指揮僉事に任命され、一方造船總兵劉清は摩崖文の末行に記す如く「宣德七年領軍至此(吉林)」つて遠征の準備を整へ、亦失哈は遼東都指揮康政と共に官軍二千を乗せた巨船五十隻を率ゐ、松花江の解氷を待つて宣德七年三・四月頃吉林を發して奴兒干に向つた。<sup>註</sup>吉林より特林まで順流約四千五百支里、恐らく月餘を費して彼の地に至り、奴兒干都司を再建し、永寧寺を重建し、年を越して翌八年の解氷期に歸還の途に着き、七・八月頃歸朝したのである。是が亦失哈のそして明の奴兒干招撫行の最後であつた。奴兒干都司維持の工作はその後暫らくは續けられてゐたが、最後の奴兒干奉使を終へた亦失哈は次には

遼東鎮守太監として遼東に姿を現はす。英宗實錄宣德十年十月（乙卯）の條に

鎮守遼東太監亦失哈等奏。近者朵顏三衛縱其部落。數來擾邊。乞舉兵征勦。……

と見え、續いて正統六年九月（甲寅及丙辰）、十二年九月（丙午）、十四年九月（乙酉）、同年十二月（壬子）等に鎮守遼東太監亦失哈又は鎮守太監亦失哈の名が見える。其他にも遼東鎮守太監と明記しないがその地位に在つたとせねばならぬ亦失哈の名がこの期間に數箇所出て来る。

遼東鎮守太監は遼東志に據れば永樂中に創りその第一代は王彥、第二代は院堯民、第三代は宋文毅で亦失哈の名は見えない。監槍太監は宣德三年に、開原分守太監は正統二年に置かれた。この分守内臣の第一代に亦什哈を擧げてゐる遼東志に矛盾のある事は先述の如くである。所で右に引いた實錄では亦失哈は既に宣德十年十月に遼東鎮守太監と稱されてゐる。實に亦失哈は王彥・院堯民の後を承けて鎮守太監に任ぜられたのである。遼東志・分守内官第一代亦失哈の名は正に鎮守内臣第三代若くは第二代に置かるべきものである。この前年宣德九年三月に女直出身の太監として永樂以降三十餘年遼東鎮守の重命を擔つた王彥は京師に召還され、更に遼東志に據つてその後を襲つたとされる院堯民（實錄に院堯民）は宣德十年四月に罪に問はれ下獄されてゐるのである。その間の事情を述べると、奴兒干都司再建以來物資補給等の事が松花江畔吉林で尙繼續されてゐた。この監督指揮に當つてゐたのは院堯民と劉清であつた。その時交易の事から女直と衝突した。宣德十年正月（甲戌）採捕造船運糧等の事を悉皆停止すべき勅命が遼東總兵官巫凱・掌遼東都司都督僉事王眞・鎮守太監王彥・院堯民・門副楊宣等に下された。その命により松花江で造船採捕運糧等に從事してゐた院堯民・劉清等が回京せんとする途、中を女直に襲撃され八・九百人の士卒を失つたのでその罪を問はれたのである。従つて院堯民は採捕造船運糧等監督の爲吉林に派遣されてゐた太監であつたと思はれ、正月に命を受け回京すると直ぐ四月に下獄されたのであるから鎮守遼東太監に任ぜられたか否かも疑はしい。殊に可怪しいのは宣德十年正月造船等停止の勅命を下された職官の中に宣德九

年三月召還された鎮守太監王彦の名が並んでゐる事である。思ふに王彦は召還されたがその後任は未だ決定せず、吉林に派遣されてゐた院堯民がその後擬せられてゐたのであらうか。或は正統二年分守内臣設置以前に既に三人の太監が置かれてゐたのであらうか。併しとに角宣徳十年四月には王彦も院堯民も鎮守遼東太監でなく、ただ楊宜のみが監槍太監として残つたものと思はれる。次に遼東志の鎮守内臣第三代宋文毅の名が實録に見えるのは景泰二年正月が初である。従つて宣徳十年四月以降景泰元年までの十數年間は遼東志の鎮守内臣の條に名を列しない太監が遼東軍政の最高機關の一たる鎮守太監として活躍してゐた事になる。是が亦失哈であつたのである。さて亦失哈の鎮守太監在任中の動靜に就ては割愛して先を急がねばならぬ。

### 三

亦失哈と云ふ名は女直人を思はせる。羅福頤氏は弁州史料前編中官考により「亦失哈本廣西人」とされるが、中官考が據つたと思はれる明實錄の正統十四年十二月（壬子）の條には廣西人でなく海西人とある。次に全文を示す。

遼州百戶施帶兒見獲干虜。泄我虛實。且數爲虜使。張其聲威。常致虜酋意干鎮守太監亦失哈。旣而虜退。帶兒脫歸。

巡按山東御史劉孜收鞠之。坐斬。孜因言。亦失哈本海西人。虜犯廣寧。亦失哈禁制官軍。不使出擊。反狀昭然。況在邊久。收養義男家人。隱占軍餘佃戶。勳計百數。如不早圖。實生邊患。疏聞。詔坐帶兒罪。置亦失哈不問。註。

亦失哈は「本海西人」即ち海西女直の出身であつたのである。この一語によつて亦失哈の活躍は鮮かな照明を與へられる。この一文は亦失哈に就て色々の事を知らせてくれる。多數の義男家人を收養し、軍丁餘丁佃戸を隱占使役して遼東で大きな勢力を有つてゐた事。戰時中も北方の酋長が連絡をとる程兀良哈や女直に對してはにらみも利き或は依頼される存在であつた事。即ち彼は明の遼東鎮守太監として邊防や對女直策の樞機に參する無くてはならぬ人物であつたと共に時に女直側の代辯者、利益の擁護者ともなつてやる強い結合を女直に有つ人物でもあつたのである。しかもその重要な役割

は彼が海西女直の出身である事と密接に關係してゐたのである。この事は第一代の鎮守太監王彦に就ても云へよう。

さてこの時叛虜と意を通じ或は出撃を抑制して反狀昭然と疏告されたが不問に附され亦失哈は事無きを得た。併し是を最後に鎮守太監亦失哈の名は實錄から消える。所が翌景泰元年になつて鎮守遼東太監易信なる名が三度現れる。その最後の條は特に興味が深い。

召鎮守遼東太監易信還京。陞羽林前衛指揮使李縉爲貴州都指揮僉事。時建州衛都督李滿住潛通胡虜。都督刺塔散兵剽掠。少保兼兵部尚書干謙。以信縉皆其親黨泄事機。請密爲區處。故有是命。

即ち遼東鎮守太監易信・羽林前衛指揮使李縉は李滿住・刺塔の親黨で機密を泄らすを以て易信は遼東より召還し李縉は陞職して貴州へ敬遠されてゐるのである。二人の中李縉が李氏であるから李滿住と關係があり、従つて易信が兀者衛都督刺塔の親黨であつたと見られる。兀者衛は海西の大衛であるから、この太監易信は海西女直の出身であつた筈である。遼東志官師志には鎮守・分守共に易信なる太監の名は無い。従つてこの頃遼東鎮守太監で海西女直出身であるこの易信に相當する人物はその前年まで同じ地位に在つた亦失哈の外には求められぬ。亦失哈の名は亦什哈・伊實哈・亦信下とも寫された。<sup>註10</sup>亦信下の下が弱く發音され消えると亦信即ち易信となる。易信が亦失哈である事は疑ふ餘地はない。正統十四年の未反狀昭然と告發され尙事無きを得た亦失哈は翌景泰元年猶遼東に在つて銃の改良をはかる等してゐたが、土木の變後瓦刺の壓力が強く女直に及び、やがて海西建州の女直が瓦刺の左翼として蠢動し始めると、明の中央は女直出身の亦失哈を遼東に置く事を憂へて遂に召還の策をとつたのである。その後任として遼東鎮守太監となつた宋文毅の名が景泰二年以降に現れる事は先述の通りである。

亦失哈が海西兀者衛酋長の親黨であり乍ら何故、何時から明の内廷に在つたかと云ふ事を示す史料はない。併し洪武二十八年燕王棣が總兵官周興等を率ゐて遼東塞を出で、周興等は開原より長驅して兀者女直を討ち、後の兀者衛指揮使西陽

哈を改めて多數の俘虜を得た事註11とそれは關係がある様に思ふ。この俘虜の中燕王の側近に待して宦官となつた者が相當あつたのではなからうか。燕王の招撫の手はその後是等の俘虜を通じて女直の間に伸され、特に靖難の役には兀良哈を引いて手足としたと同じく女直に對しても招撫徵兵を頻りに行つた様である。建州女直の各酋阿哈出の女が燕王の後宮に在つた事、先述の鎮守太監王彥が「建州松花江人。國初從征靖難註12」とある事、後軍都督同知になつた王麒が同じく「舊名麻子帖木兒。建州松花江人。……從上平定內難註13」とある事、更に天順三年左順門門正忽思忽の奏に「臣海西女直人。自洪武間入事內廷註14」とある事等によれば女直が多數招撫され靖難に従軍し或は燕王の內廷に在つた事が推察される。亦失哈の如きも永樂九年既に奉使內官として奴兒干招撫軍を率ゐる程の信任を成祖に得てゐたのであるから、早くからその側近に待し恐らく忽思忽と同じく「自洪武入事內廷」した者の一人であつたと思はれる。しかもその出身が海西兀者衛である所から見れば恐らく洪武二十八年の兀者女直征討の際に俘虜になつた酋長西陽哈の一族の一人であつたのではなからうか。

亦失哈が海西の大衛兀者衛の、しかも都督刺塔の親黨註15であつた事が彼の七回に及ぶ奉使奴兒干行の重要な資格の一であつた事は今や明かである。呼蘭河から屯河附近までの東流松花江流域に據る兀者諸衛は交通路の必然的條件から松花江下流並に黑龍江流域を控制し、或は中國や蒙古地方とを仲繼する重要な位置を占めてゐる。故に下流の女直に對しては軍事的經濟的或は文化的に優越した地位に立ち強大な威壓を及ぼし得る。亦失哈はその兀者諸衛の壓力を背景とし、その保護協力を得る事が出来る人物であつたのである。亦失哈に關聯して奴兒干奉使行が招撫工作であると共に官營貿易であつた事等に就ても述べたいが、紙數の關係で次の機會に讓る事とする。

註1 滿鐵調査部「滿洲金石志稿」第二册序言一策四參照、本稿引用碑記は右志稿に據る。

2 羅福頤氏「滿洲金石志」卷六

3 前記「滿洲金石志稿」に據る。

4 亦失哈の奴兒干奉使回數に就ては別の論文に詳細に考究するのでここでは一々史料を擧げぬ。



太監亦失哈に就て

二六

- 5 「宣宗實錄」宣德九年三月庚辰の條。
  - 6 「英宗實錄」宣德十年四月辛酉の條。
  - 7 羅福頤氏「滿洲金石志」卷六奴兒干永寧寺碑解説の條（二十枚表）参照。
  - 8 明史宦官傳曹吉祥傳に附載された亦失哈傳はこの事件を説くのみで、しかも「本海西人」なる語は省略してゐる。
  - 9 「英宗實錄」景泰元年閏正月（癸巳）、同四月（癸巳）、同五月（戊午）の條。
  - 10 亦什哈は「遼東志」官師志・分守内臣の條。
  - 11 伊實哈は「大清一統志」・盛京統部・名宦劉孜傳。亦信下は「滿洲金石志稿」第二冊、百十三昭勇將軍崔源墓誌銘に夫々見ゆ。
  - 12 和田清博士「明初の滿州經略」上洪武廿八年の役（二七九頁）参照。
  - 13 「遼東志」官師志・鎮守内臣の條。
  - 14 「太宗實錄」永樂二十年十二月（庚午）の條。
  - 15 「英宗實錄」天順三年二月（辛巳）の條。
- 西陽哈と刺塔との關係は系譜的には明かでないが、當時の女直諸衛の承繼の例より見て刺塔は西陽哈の最近親恐らく子姪であると見て誤らないであらう。